



保育

の

創意工夫

6

## 雨の日の散歩

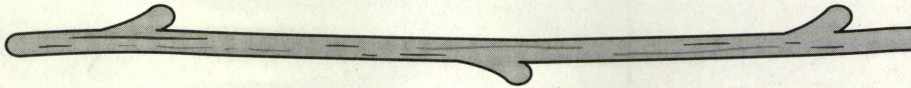
前原 寛

六月から七月にかけては、雨の季節です。うつつしい日が続きますが、特に鹿児島では晴れ間がなかなか拝めない時期になります。

個人的なことですが、私は学生時代を東京で過ごしました。生まれ育った鹿児島と東京とはさまざま違いがありました。カルチャーショックを受けた一つが梅雨でした。

上京して間もない六月から七月、ちょっと肌寒くて天気が悪いなあと思っていたら、いつの間にか梅雨明け宣言がありました。「えっ、いつ梅雨があったの?」と驚いてしまいました。

鹿児島では、梅雨は本当に連日雨が降ります。たまに陽光が雲の切れ間から

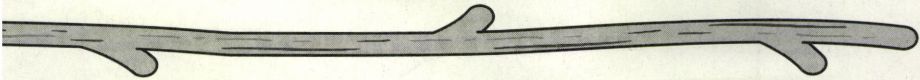


差し込んでくると、お日様がいたんだ、と思わず言いたくなってしまいます。また、梅雨明け間近になると、必ずと言っていいほど災害をもたらすような集中豪雨があります。土砂崩れがあったり、鉄砲水が出たりして、やっと梅雨明け、本格的な夏を迎えます。

それが梅雨だと思っていたので、東京の梅雨には拍子抜けしました。さほどの降りでもありませんし、ごく日常的な雨の延長にすぎないように感じられたものです。

そのように鹿児島島の梅雨時期は、雨に降り込まれてしまいます。小さな子どもたちは、保育園の園舎からほとんど出ることもできずに、何日も過ごしています。おまけに、湿度も上がり、不快指数も高くなります。梅雨は、いかにして室内で心地よく過ごせるかということが、課題になる時期です。この課題に対する対応はきちんとしなければなりません。しかし、梅雨だから室内に限定されなければならないということはありません。屋外での活動を想定してもいいはずです。

私のかかわっている保育園では、年間を通して散歩を盛んに行っています。季候のいい時期など、〇歳児から五歳児まで全園児が散歩に出かけ、保育園に



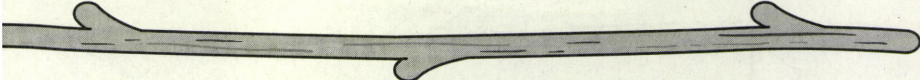
子どもが誰もいない時間帯があったりします。ただそれは、雨が降らず穏やかな日中の時です。以前は、雨が降ると散歩に行けないと思い込んでいましたが、そこで発想を変えてみると、雨だからこそ出合える環境があるのではないかと気づきました。

散歩という活動は、環境構成という視点から見ると、子どもの周囲の環境を構成するのではなく、別個の環境状況の中に子どもを連れていくということになります。つまり、園内では出合えない環境に出合つのが、散歩です。

そう考えると、雨の日に散歩に出かけられないと思ひ込む必要はなくなりま  
す。むしろ、雨の日は、ほかの日とは違う環境に子どもが出合える貴重な日であるといえます。

特に梅雨時期のように、何日も室内活動に制限され、園庭にもなかなか出られないような時こそ、散歩をする意味があるのではないだろうかと考え、雨の日の散歩を試みるようになりました。

もちろん、災害が起きるような大雨の日は論外です。子どもに無理のないと思えるような雨の日を選びます。また、三歳より小さな子どもたちには全く危険がないともいえませんので、必然的に年齢の上の子が中心になります。雨具としては、傘は扱いにくいので、雨がっぱを着ることにしています。足元は長



靴です。そうすると、両手が空くので動きやすくなります。また梅雨時期は、濡れてもさほど寒さを感じずにすむ季節ですが、散歩から帰ってきてからの着替えの用意は必要です。

そのようにして、梅雨時期に、五歳児を中心にして何回か散歩に出かけます。散歩のコース自体は、雨の降らない時と同じです。しかし、雨の日は、同じコースでも見せる装いが異なります。思いがけない所に水たまりがあるのを発見したり、雨に濡れた草花の様子を見たり、カエルを追いかけたりと、まさに雨の日ならではの環境が、子どものかかわりの中に現れてきます。いつもは水たまりに入らないように注意することが多いのですが、雨の日の散歩では特に注意する必要もありません。そうすると、子どもたちが水たまりでパシャパシャする行動は、あまり見られなくなるものです。

日常の生活には、晴れの日も雨の日もあるのが当たり前です。保育園での子どもの活動も同じです。むしろ、そこまで含めた時、子どもの活動が豊かになっていきます。

雨の日の散歩。梅雨時期をうつつとつしくいやな時期だと思つのではなく、その時期にしか出合えない環境があることを大切にしたいと思ひます。

(鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長)